
異世界チャンピオン

武者小路

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界チャンピオン

【Nコード】

N0423P

【作者名】

武者小路

【あらすじ】

ポケットモンスターの世界に迷い込んでしまった一人の少年。

彼の記憶の中に存在したのは謎の世界に存在する謎の生物、ポケモンに関する知識だった。

元の世界に帰るため少年はイッシュ地方を駆ける。

1 タブネ

——ここはどこだろう。

瞳を閉じたまま、考えを巡らせる。

背中越しに伝わる感触は柔らかく、心地良い。

しかしそんな感覚とは違い、俺の心は何とも淀み切っていた。

ゆっくりと目を開いてみても、その気持ちは変わらない。

飛び込んできた景色は優しく揺れる緑の木々たち。

心が安らぐようなそんな景色も、まったく見知らぬものだった。

「ねえねえ、大丈夫？」

突然聞こえてきた声とともに、体を激しく揺さぶられる。

慌てて飛び起き、横を見ると見慣れない生物がいた。

「えっと……なにこれ？」

薄いピンク色をした体に、大きな耳。

そこから垂れ下がった触角のようなものは先端でくるりと丸まっている。

そんなおおよそこの世界には存在しないような生き物が、俺の顔を不思議そうに見つめていた。

「よかった。大丈夫だね」

謎の生物は俺の質問に答えることはなく、この場から去ろうとする。しかし、俺はそいつを呼び止めた。

「あの、ちょっと待って」

俺の声を背中越しに聞いたピンクの物体は再び不思議そうな顔をしながらこちらに振り返った。

ここがどこかくらい謎の生物に聞いてみても損はないだろう。

どうやら危険ではないみたいだし。

そんな時期尚早とも思える判断を下しながらも、恐る恐る声をかけてみる。

「あー……ここはどこなのかな？ あとそれなんだけど、着ぐるみとかじゃない……よね？」

俺が指差すのは目の前の謎生物。

サイズから見ても人が入っていないんじゃないだろうか。

謎生物は首をかしげながら沈黙する。

次に俺が耳にしたのはとんでもない一言だった。

「……なんだろうこの人。野生のポケモンに話しかけたりなんかして、ちょっとおかしい人なのかな？」

可哀そうな人を見るような目を向ける謎生物。

よくわからない場所に放り込まれて、拳句の果てによくわからない生物に暴言を吐かれるなんて、俺は何か悪い事でもしただろうか。

「なんだよ、失礼な奴だな。それにポケモン？　なんだそれ」

なんかどっかで聞いたことあるような気がするけれど、思い出せない。

ポケモン？　この生き物のことだろうか。

解答をせかすように謎生物を見るが、その表情は予想外の驚きに染まっていた。

「お姉ちゃん、ポケモンの言葉……わかるの？」

真ん丸と見開かれた瞳が俺を見据える。

森の中を風が吹き抜け、ポケモン”タブンネ”の触角が揺れた。

唐突に思い出す、このポケモンはタブンネ、ヒヤリングポケモン。

だけど今は……それより。

「お姉……ちゃんだって？」

今こいつはお姉ちゃんといっただろうか。

それは女性に対して使う言葉であって、どう考えても俺が対象になるような言葉じゃないはず。

「お前今……お姉ちゃんって言った？」

そんな確かめるような問いにも謎生物、いやタブンネは驚きの表情を崩すことはなかった。

「えっ……まあ言ったけど、そんなことよりなんでお姉ちゃんポケモンと話せるの！」

どうやら二人とも別のことで驚いているようだ、絶対に俺の方が深刻な驚きだけど。

さつきから普通に喋っているつもりの声だって、なんだかいつもと違うような気がしてきた。

本当に深刻だ。

「こっちにとつてはそっちの方がどうでもいいよ！ とにかくほら、なんか鏡とか持っていないの？ お前には俺が女に見えてるんだろ？」

一刻も早く自分の容姿を確認してみなければならぬ。

もしかしたらまだ男だっている可能性も残っているかもしれないし。だけどタブンネの反応は案の定予想通りだった。

「そんなの持つてる訳ないよ！ わたしはポケモンなんだから」

混乱したように大声を出すタブンネ。

「ああ、もう！ わかってるよそんなの。こっちだって混乱してるんだ、あまり大声を出すなよ！」

そんなことを言ってる俺だって、負けないくらい大声だ。
このままでは喧嘩に発展してしまう。

ここでこの世界を知っているであろうこいつにこの場を去られるのは得策じゃない。

「……ああ、えっと、とりあえず一回落ち着こう」

「そ、そうだね」

俺の提案に案外あっさりと乗ったタブンネは疲れたように地べたに座り込む。

そんな様子を見た俺も、疲れと混乱から地面に腰をつけた。

「とりあえず、いくつか質問してもいいかな？」

二人が落ち着いたのを見計らい、タブンネへと話しかける。
タブンネはゆっくりとこちらに顔を向けた。

「……どうぞ」

短かな返答を聞き、頭でまとめた質問を投げかける。
とりあえず、俺が女になってるかもしれない疑惑は今は確かめようがないし、ほかの質問がいいだろう。

「……はどのかな？」

まずは場所の把握。

こんな奇妙な生物がいる以上、俺が知っている場所な訳はないだろうけど、それでも現在地の把握は重要だ。

「ヤグルマの森だよ。ほら、シッポウシティの西の」

ヤグルマの森にシッポウシティ。

何やら地名が二つ出てきたけれど、どちらも知らない場所だ。まあ、後者はシティって言っぐらいだから、町なんだろう。

「じゃあ、こっちも質問してもいい？」

考えを巡らせていると隣からタブンネの声。

質問に答えてやったんだから、こっちにも質問させろってことだろう。

いや、そんなきつい感じには思っていないかもしれないけど、表情はそんなかんじだ。

「ああ、どうぞ」

返事をして質問を促すと、すぐに言葉が飛んできた。

「……普通ポケモンと人って話すことなんてできないよね？ さっきも聞いたけど、お姉ちゃんはどうしてポケモンと話せるの？」

予想はしてたけど、やっぱりさっきと同じ質問だ。

「なんでって聞かれても……自分にだってわかんないよ。気づいたらここにいて、ポケモンとかいうのだって知らないはずなのに」

「知らないはず？」

隣のタブンネが首をかしげる。

「ほら、君はタブンネっていうポケモンでしょ？ 俺はポケモンのことなんて本当はこれっぽっちも知らないんだけど、ここで目覚めた時からさ、こうなんて言うか、頭に浮かんでくるんだよ。ポケモンのことが」

「……ふうん」

身振り手振りを交えながら説明してみるが、どうにも伝わっていないみたいだ。

自分にも分らないことである以上、相手に納得させるなんて至難の業だ。

これ以上説明してみても無駄なのかもしれない。

「まあ、わかんないかも知れないけどさ。とりあえず俺は行くよ。ここでじつとしていても何にもならないし」

そう言いながら立ち上がる。

見知らぬ土地で知っているところはないけれど、とりあえずさっき話に上がったシッポウシティって所に行ってみれば何かわかるかも

しれない。

わからないにしても、とりあえず自分の容姿を確認することはできるはずだ。

「……ちよつと待って」

タブンネに背を向け歩き出そうとすると、背後から声が聞こえた。何かを決意した様な、そんな声。

「なんだかよくわからないけどさ、お姉ちゃん今すごい困ってるんでしょ？」

俺は素直に頷く。

「話を聞く限りポケモンも持っていないみたいだし、わたしも一緒に行く。いいかな？」

まっすぐな瞳で見つめられると、断ろうにも断れない。

正直に言ってしまうえば、タブンネが俺の力になってくれるとはあまり思えないのだ。

「あー、気持ちは嬉しいんだけど……」

「断るの？ ここの森、毒とかそういうの持ったポケモンでいっぱいなんだけど？」

もはや脅しとも取れる衝撃事実を並べるタブンネ。
これはやっぱり断っちゃいけないんじゃないだろうか。
ほら、好意は無駄にはできないし。

「それじゃあよろしく頼もつかない。ははは……」

俺の言葉を聞いてタブンネはにっこりとほほ笑む。
それはやっぱり純粹な好意にあふれた笑顔だった。

2 ヤゲルマの森 トレーナーの掟

今思えば別に、性別を判断する材料なんて、自分を客観的に見なくともたくさんある。

言ってしまうはある場所を確認さえすれば、面倒なことなど一切なく、一発でわかってしまうのだ。

だけど今俺にそんな勇氣はない。

本当はさっき感じた声の違和感だってそうだし、現在進行形で感じてる下腹部の違和感だってもう確かなものになってきている。

そっちに意識を向けてしまえば、答えなんてもう出ているようなものだ。

「……なあタブンネ。この森さ、いつまで続くの？」

改めて見渡すヤゲルマの森は静けさに包まれ、揺れ動く葉の間からそそぐ光が、神聖な雰囲気醸し出す。

脅し文句として使われた虫ポケモンたちにも襲われることなく、俺たちは依然この森を進んでいた。

「うーん、もう少しかな。お姉ちゃんが倒れてたのは結構森の奥の方だったし」

数歩先を先導していたタブンネは俺の問いに立ち止まると、笑顔で答えた。

正直言ってあまり強そうとは言えないタブンネだけど、どうやら毒とか麻痺とか、そういうった治療方面の能力が高いみたいだし、虫ポ

ケモンに襲われてもその点では安心できる。

「あつ！ お前トレーナーだな？ 俺と勝負しろ！」

だけど、そう。

こういった場合にはどうやっても活躍が見込めないんじゃないだろうか。

「……おいつ、無視すんなよっ！」

俺たちの姿を認識するや否や、強引に勝負を仕掛けてきた少年はまたくもって引き下がる様子はない。

まさか、目が合っただけで勝負を挑まれるとは。
とんだ無法地帯だ。

「えっと、ごめん。俺……ああ、私に何の用かな？」

少しでも穏便に事を進めようと、余計な疑問を抱かせないような言葉で話しかける。

一人称が女性用なのだってここだけの辛抱だ、と思いたい。

「何って、ポケモントレーナー同士が出会ったらすることは一つだろ？ 俺と勝負だ！」

半袖に短パンといういかにもな格好をした少年は興奮した様子で挑戦状を叩きつける。

ここでいう勝負というのはこの少年と俺の殴り合いなのか否か。
仮にそんな野蛮な事だとしても、俺の背丈の三分の二程度しかない
この子には恐らく勝つことができるだろう。

だがしかし、それで良心が痛まない程俺は冷酷非道ではない。

「まあ、落ち着いて。ここで君と私が殴り合いをしたところで二人
にとってなんの得にもならない。むしろ損ばかりさ」

こんなに余裕ぶっつてられるのも、相手が子供だから。
もし喧嘩を吹っかけて来たのが筋骨隆々の成人男性であつたら、こ
うはいかない。

だけど想定に反して、少年の顔に浮かんだのはなんとも訝しげな表
情だった。

「何言つてんだよ姉ちゃん。俺はポケモンで勝負をしようって言っ
てんの。殴り合いなんかしないよ」

「えっ？ ポケモン勝負？ それってつまりどういう事？」

「姉ちゃんトレーナーだろ？ ポケモンバトルもしたことないのか
よ」

この少年の瞳に俺はトレーナーとやらとして映ってしまっているよ
うである。

そんな誤解をどう払拭したらいいかと思案していると、今まで黙り
こくっていたタブンネの声が背後から飛んできた。

「ポケモンバトルっていうのはポケモン同士を戦わせること。トレーナーはそのポケモン達に命令する人のことだよ」

出来るだけ俺に近づき、小声で話し掛けてきたタブンネの助け舟により、疑問が少し解決する。

小さく礼を言つと、俺は少年の方に向き直った。

「ええと、うん。知ってるよポケモンバトル。昔はよくやったものだよ」

まずは今までで不審に思われた部分を取り返す。すると、少年は俺の発言へと食いついてきた。

「なら話は早いぜ。さっそくバトルだ！」

再び息巻く少年には悪いが、ここらが断わり時だ。

「いや、でも悪いね。今はポケモンも持ってないし。今回は縁がなかったという事で」

そう言つて、森を進もうと歩き出した俺を少年はまだ逃がさなかった。

「ちょっと待ってよ。そのタブンネは姉ちゃんのポケモンじゃないのか？」

まだ食い下がるか、しつこい奴だ。

そう思いながら数分前の自分の行動を後悔する。

タブンネの同行の申し出を、もう少しちゃんと断っていればこんな面倒臭い事にはならなかったのに。

「お姉ちゃん、私なら戦えるよ。この人もこんなに言っているんだし、勝負してあげようよ」

拳句の果てには予想外。

タブンネすらも勝負に乗り気になっている。

「まあ、このタブンネは私のポケモンだけどね、今はこの一匹しか持っていないから勝負はまた今度にしよう。ここでこいつに倒れられたら私この森抜けられないしさ」

これならいける！

素晴らしくもつともらしい言い訳を紡げた俺の足はもう既にシッポウシティへと向いている。

しかし、その足が進む事は無かった。

「それなら心配すんなって。シッポウシティはすぐそこだからな」

少年の発言ももつともだ。

いや、俺自身が勝負に乗り気でない時点でこの発言は全然もつともじゃあないんだけど。

でももう、勝負の舞台が整ってしまった気がした。

やる気まんまんの一人と一匹に見つめられ、答えを迫られたらこれ

しか言えまい。

「……分かった。一回だけだぞ！一回だけだからな！」

3 ヤグルマの森 ～VSケイタ～

比較の木々が少なく、平らな広場に俺と少年は向かい合わせに立っている。

広場といっても人工的なものではなく、草の絨毯が敷かれただけの天然のもの。

特別に長い草も見当たらず、ほとんど芝の様な地面はポケモンバトルにうってつけ。

そう少年が判断したのだ。

「準備はいいか？ 姉ちゃん」

背中を向けるタブンネのその先、今回の勝負の相手が佇んでいる。

「……そういえば、自己紹介がまだだったな。俺はケイタ。姉ちゃんは？」

少年改めケイタから飛んできた、これ以上簡単な事はないような質問は予想以上に俺の頭を悩ませた。

名前。

俺がまだ男で、こことは恐らく違うであろう世界にいた時の名前なら簡単に答えることができる。

だけどそれでは今の容姿にそぐわないのではないか。

ここは格好良く、かつ上手く誤魔化しておくのが吉だろう。

後々解決しなくちゃならない問題は増えたけれど。

「私に勝ったら教えてあげるよ」

「へっ、望むところだ。いけっ！ フシデ！」

ケイタの手から放たれた赤白のボール。

それは地面にぶつかると二つに開き、閃光を放つ。

雄叫びとも取れる鳴き声と共に現れたのはムカデポケモン、フシデだった。

「勝負は一体一。先に戦闘不能になった方の負けだ。いいな？」

ケイタの問い掛けに頷く。

「手加減は無しだ！ それじゃあいくぜ！」

気合の籠った熱い叫び。

そんな熱気を纏い、たんパンこぞうのケイタは勝負をしかけてきた。

「フシデ！ 相手に近付け！」

指令を聞き、ケイタのポケモンがそそくさと動き出す。

ムカデといえど、その体はずんぐりむっくりといてあまり速くは動けないはず。

ここは様子を見るべきだろう。

しかし、動き出したフシデは予想外のスピードだった。

「ポイズンテールッ！」

体を丸め、転がる様に接近したフシデにケイタの指示が飛ぶ。
タブンネの目前へと迫ったフシデはぶつかる直前に上空へと舞い上がった。

「よっ、避ける！ タブンネッ！」

転がる勢いをそのままに、全身をバネの如く使い飛び上がったフシデはその尻尾をタブンネの脳天へと叩き付ける。
まずいっ！ モロに食らった！

「大丈夫か！ タブンネ！」

重い一撃を頭に食らったタブンネは少しふらついている。

「だ、大丈夫だよ。それより……早く反撃を」

開始早々大ピンチだ。

タブンネの様子からして、早目に決着をつけなきゃ危ない。
元々乗り気だった勝負ではないけれど、こんな少年に負けるのは悔しいし、それに……。

「いいぞ、フシデ！ お次はいやなおとだ！」

休む暇など一切与えず、下されるケイタの攻撃指示。

反撃をしようにも、タブンネがどんな技を覚えているのかわからないし、相手の技の効果すら全くわからない。頭にある知識はポケモンの習性だとかそんなのばかりで、訳にたちやしない。それなら。

「タブンネ、お前はどんな技が使える……」

タブンネへと話し掛けたその瞬間。

辺りに響き渡る、金切り声。

まるで超音波の様な不快な鳴き声が木や草、そして葉を揺らす。これが……

「これが、いやなおとつ……？」

思わず耳を塞ぎ、直前に発した声もタブンネには届かず掻き消された。

「よ、よしっフシデ、ころがるだ！」

自身のポケモンの攻撃に、ケイタも顔を歪めながら指示を出す。だがしかし、先程の俺の様にケイタの声もフシデには届かないはずだ。

そんな予想も虚しく、鳴き声を止め、フシデは再び体を丸め始めた。

「まずい、タブンネ！ なんでもいいから避ける！」

「そんなデタラメな命令じゃあ、この攻撃は避けられないぜ！」

体を丸め終えたフシデは高速で回転し、地面をタイヤの様に疾走する。

その標的、タブンネは未だに耳を塞ぎ、いやなおとのダメージから回復していない。

もう鳴き声は止んでいるのに……。

「……そうだ」

タブンネの聴力は桁外れ、人間の何倍ともしれない。

それにあんな声を浴びせれば、ダメージだって桁外れのはずだ。

このままじゃ、負ける

俺の目線に映るのは自らの足元。

自らのポケモンでも対戦相手でもなく、緑の芝だけ。

その瞬間、大きな衝撃音と共にタブンネの声が響き渡った。

「タブンネ、戦闘不能だな」

無情にも下されるケイタの声。

俺の初めてのポケモンバトルは敗北に終わった。

ゆっくりと顔を上げると、地面に横たわるボロボロのタブンネが視界に映る。

背中を向け、表情は見えないけれど、きっと苦しそうな顔をしているに違いない。

『申し訳ない。』

ただその言葉が、頭に浮かぶばかりだった。

「姉ちゃん。そのタブンネ、ボールに戻してポケモンセンターに連れて行った方がいいぜ」

呆然と立ち尽くす俺を見かねたのか、ケイタは何やら良くわからないことを言う。

ボール、というのは多分、さっきケイタのフシデが出てきた赤白のやつだと思うけれど。

「そ、そんな事より、ほら！ ポケモンの病院とかさ、そういうのはないのか？」

一刻も早く治療をしなければ、もしかしたら死んでしまうのではないか。

そう思つての問いにケイタは何故か、吹き出す様に笑った。

「もしかして姉ちゃん。ポケモンセンターも知らないのか？」

「い、いや、知らないけどさ。それよりも一刻も早く……」

「落ち着けて。ポケモンバトルは喧嘩じゃないんだ、そのタブン

ネも気絶してるだけだよ。それに、ポケモンセンターっていうのが所謂病院なんだぜ？」

そう言っただけでケイタは再び笑う。

でも、その病院に連れて行った方がいいってことはやっぱり相当な大怪我なんじゃ……

「そこに行けば多少の怪我はすぐに治るからさ。ほら、行った行っただ」

ケイタは呆れながらも、森のある一点を指差す。
どうやら、そっちに向かえばシッポウシティへと着くらしい。

「わかったよ。……それじゃあまた」

森を抜ける為、タブンネを持ち上げようとすると、またまたケイタが俺を呼び止めた。

「ちょっと待て。一体、何やってんだよ。ポケモンはボールに戻して運ぶもんだろ？」

再び出たボールの話。

しかし生憎俺は今、ボールというものを所持してはいない。

「いや、私ボール持ってないんだけど」

「はあ？ そのタブネ、姉ちゃんのポケモン何だろ？ 何でボール持っていないんだよ？」

今までの一段階上の呆れ顔でケイタが詰め寄る。
何でと言われても、俺が聞きたいくらいだ。

「……まあ、もういいや。ほら、これ使えよ」

ケイタが差し出したのは一部がクリーム色、そして大半が濃いピンクで彩られたボールだった。

大きさもケイタが投げたものとは違い小さく、手のひらに乗せても広く余るほどだ。

「使っつてどうやって？」

素直に疑問を吐きだすと、ケイタはため息をついた。

「まず、この真ん中のボタンを押すと、モンスターボールが大きくなる。まあ、これはヒールボールだけどね」

ケイタがボールの中心に付けられたボタンを押すと、一瞬にして手のひらサイズへとボールが大きくなる。
一体どういう原理なのだろう。

「そして次に、このボールをポケモンにぶつけると、ゲット出来るわけ。ほら、やって見て」

恐る恐るボールを受け取り、タブンネへと近付ける。
ボタンがタブンネへと触れると、蓋が開き赤い光が飛び出す。
驚いて尻餅をつく、既にその場にタブンネの姿は無かった。
意外に、呆気ないものだ。

「えっと、いろいろありがとう。それじゃあまた！」

「あつ！　ちよつと！」

大丈夫だと言われても、不安なものは不安。
挨拶もそこそこに、タブンネをポケモンセンターに連れていく為、
俺はシッポウシティへと急ぐのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0423p/>

異世界チャンピオン

2011年10月7日13時55分発行